# ２　計画地の環境

## 2-1　町の概要

本町は、福岡県の東南端で大分県境に接する内陸部に位置し、東西13㎞、南北16㎞、総面積132.20㎢を有している。町域の83%が森林(人工林は町域の70%)となっており、町の南に位置し古くから信仰を集める霊峰英彦山は、昭和25(1950)年に国内最初の耶馬日田英彦山国定公園に指定され、九州の中央部を形成する山地の北の玄関口として位置づけられている。

人口の10,909人うち、高齢化率が33.7%(平成22(2010)年現在)と高く過疎化も進んでいる。

主要産業は農林業と観光であり、英彦山を中心とした山間産業が主体となっている。

図2-1　本町の位置

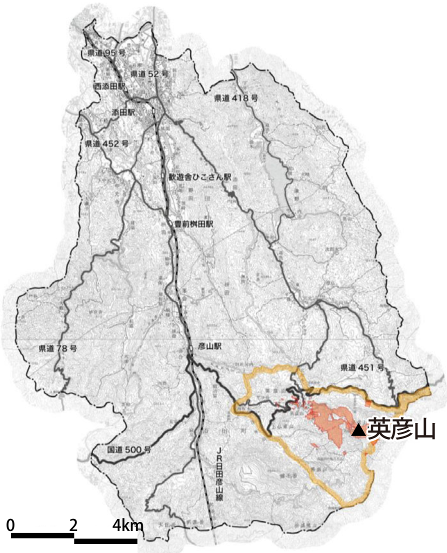



図2-2　英彦山の位置

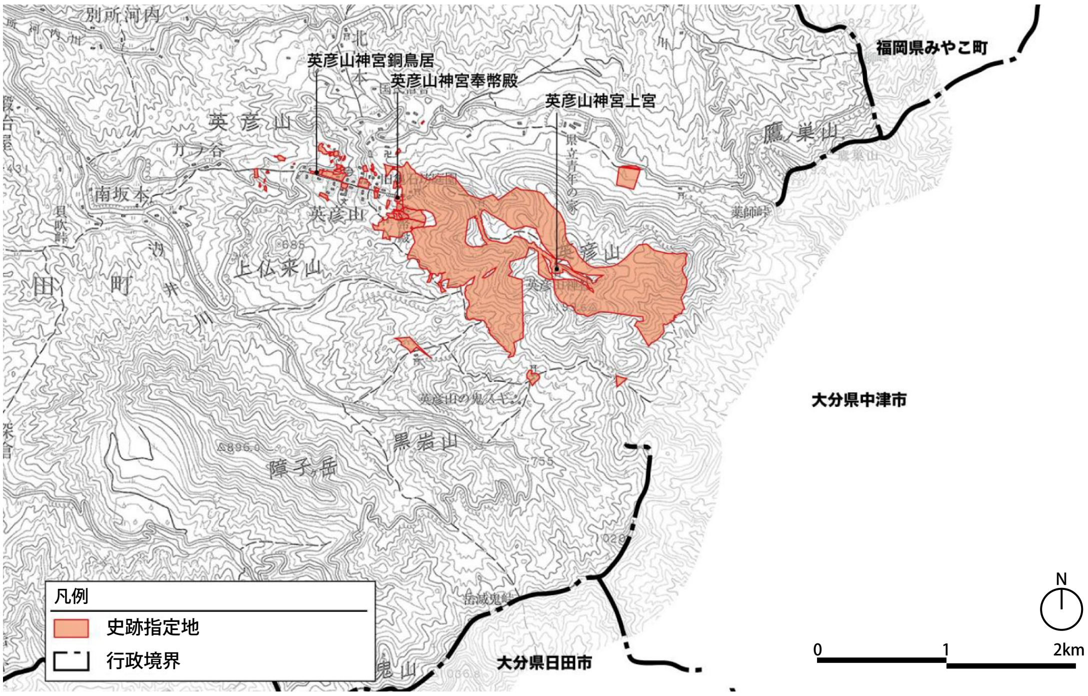



図2-3　史跡指定範囲

# 2-2　自然的環境

## (1)地形・水系

地形は、標高約1200mを有する英彦山を主峰として、東方に鷹巣山、一ノ岳、犬ヶ岳(豊前市)、経読岳(中津市)、西方に岳滅鬼山，釈迦ヶ岳など山並みが高原状に連なっている。

英彦山は、英彦山神宮(上宮)のある中岳(1188.2m)を中心に北岳(1192m)と南岳(1199.5m)の三峰に分かれている。北部の眼下に筑豊の山野が広がり、南部の方角には遠く久住・阿蘇を眺望することができる。

主要河川は、英彦山に端を発し、本町の中央を流れる彦山川、東側の津野谷を流れる今川、本町の西南端の町境を源流とし、西側の中元寺谷を流れる中元寺川等があり、英彦山内にはその他、谷筋沿いに流れる沢がいくつも見られる。

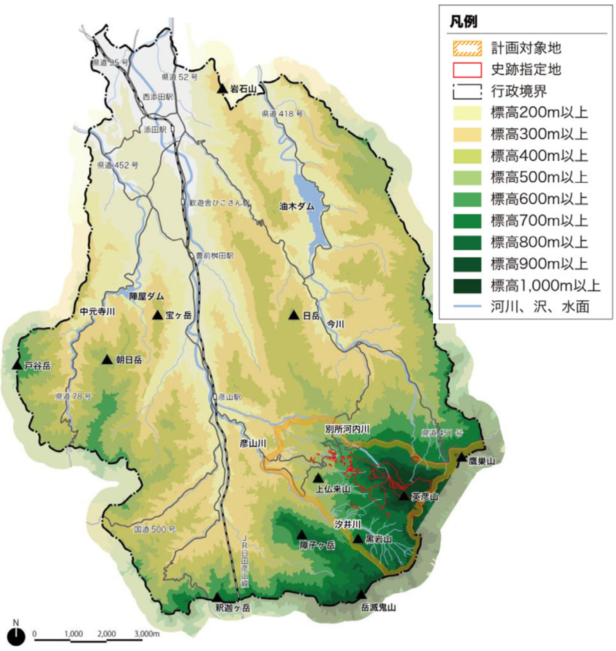



図2-4　地形、水系
参考文献）添田町教育委員会『英彦山総合調査報告書』(平成28(2016)年)

## (2)気候

本町の平野部から英彦山の山頂まで1100m以上の標高差がある。そのため英彦山の気温は、年間平均12.3℃と平野部よりも低く、冬期は多量の積雪に見舞われる。また、年間降水量も平野部よりも多く、一年を通じて6月から7月の降水量が多い。

## (3)地質

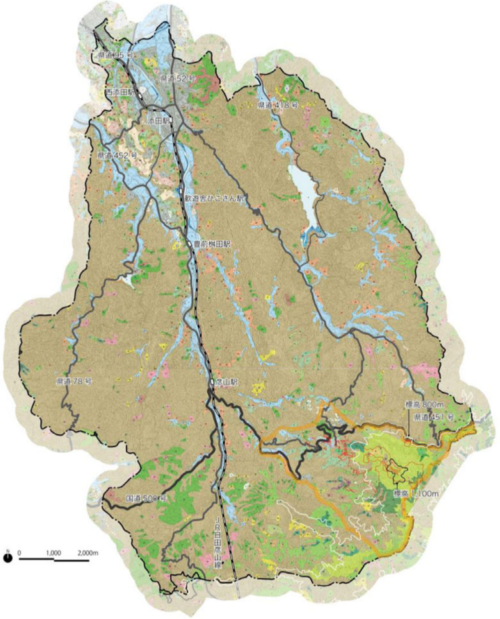
英彦山は、新第三紀のおもに鮮新世(約500万-約170万年前)から第四紀更新世(約200万年前)のはじめにかけての火山活動によって成立したものである。最終的には同質の溶岩流である英彦山溶岩、岳滅鬼山溶岩、障子ヶ岳溶岩などを形成して終了したとされている。

現在見られる山体は、東北東-西南西に雁行状に配列した多くの東西性の裂け目群が噴出口となり形成され、深い渓谷や巨石、岩窟は、長年をかけて削られた山が低くなり生まれたものであり、かつての英彦山の山々は少なくとも現在より数百メートル高かったと推測されている。

## （4）植生

英彦山内の高等植物のうち「英彦山」の名を持つ唯一の植物であるヒコサンヒメシャラがあり、英彦山を基準標本山地としている。また、県内では英彦山だけに限られるオオヤマレンゲや、その他、ツクシシャクナゲやミヤマクマワラビ、フジシダ、イワオモダカなどの生育も確認されている。

なお、英彦山は平成３（1991）年の台風の来襲により、表参道沿いの「千本杉」が全滅したのをはじめ、ブナ林、岩上の天然ヒノキ林、岩角地植物群落などに壊滅的な被害を受け、植生が大きく変化した。



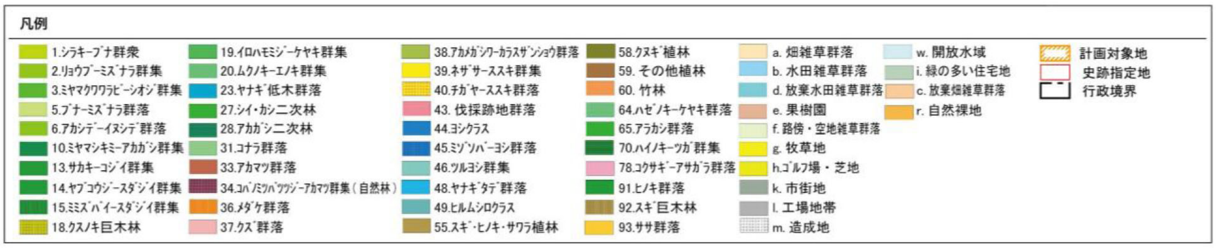




図２-５　植生分布図
参考文献）添田町教育委員会『英彦山総合調査報告書』（平成28（2016）年）

## （5）動物

英彦山に自生する多くの植物に依存して、哺乳類や鳥類、爬虫類、両生類、昆虫等の極めて多くの動物が棲息している。

大形の哺乳類ではシカが多く生息しており、イノシシやタヌキ、キツネ等による農作物への被害が英彦山とその周辺の山域に拡大している。

鳥類の種類は、現在93種と報告されており、中でもブッポウソウは昭和32（1957）年に福岡県の天然記念物に指定された。爬虫類にはタカチホヘビやマムシ等、両生類にはブチサンショウウオやカジカガエル等が生息している。昆虫類は、これまでに蝶類が８科87種、蛾類が52科1,600種、さらに約50種の新種が発見されている。既に昆虫相が解明されている他の地方と対比させた英彦山の総種類数は、6,000種を大幅に上回るものと推定される。

ブッポウソウ

# 2-3　歴史的環境

## （1）原始

### 縄文時代

英彦山山麓の扇状地には、多くの縄文時代の遺跡が存在している。後遺跡の土壙墓から出土したヒスイ製大珠は、遠く1000kmも離れた新潟県糸魚川からもたらされたもので、当時の人々の交易圏の広さを示すものである。

### 弥生時代

庄原遺跡から、古代中国の楚（B.C.230頃）の領域で多く発見されている銅鉇の鋳型が発見されていることから、早くから大陸と文化、技術交流をもっていた遺跡の１つとして、弥生時代の社会を知る重要な遺跡として注目されている。

### 古墳時代

遠賀川の上流に岩瀬古墳群等が存在することからは、大陸・朝鮮半島から進んだ農業生産技術の導入による稲作の普及が進んだことを示すとともに、それまでの小地域集団が結合され、小国家体制が整備されたことを示している。

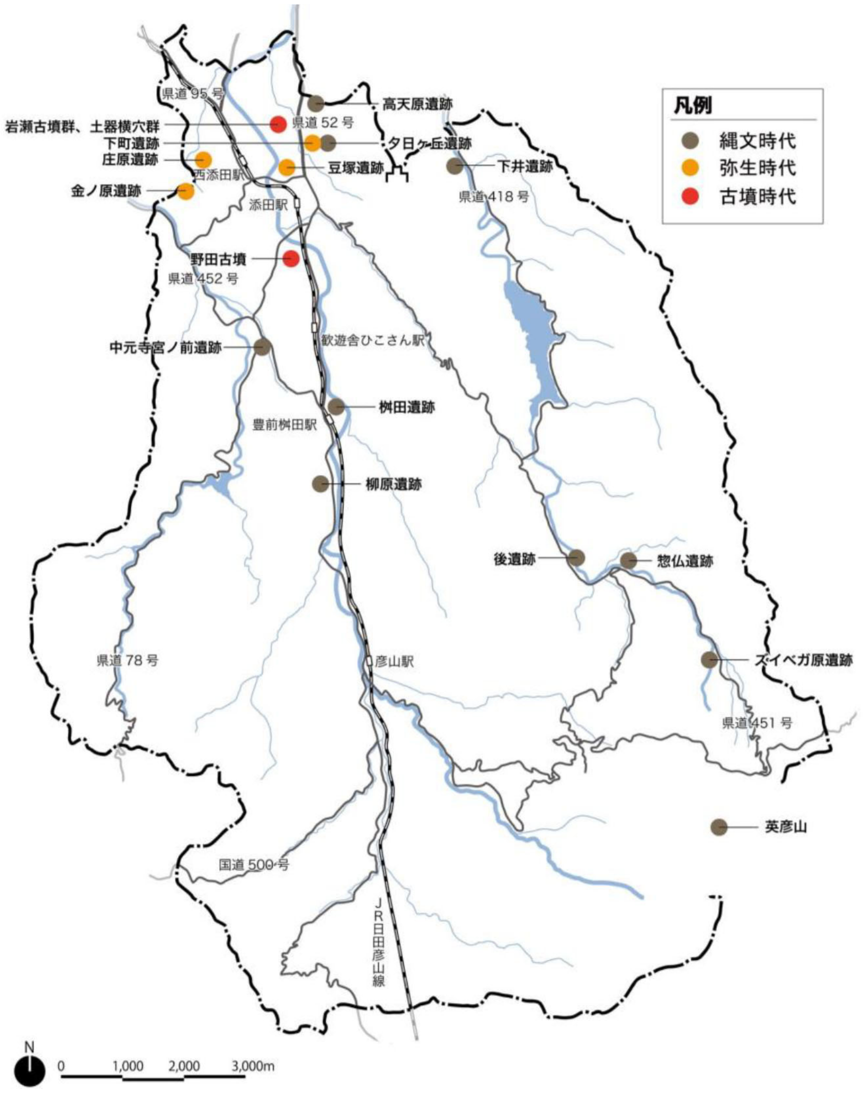



図２-６　主要遺跡の分布

## （2）古代

### 奈良・平安時代

中元寺宮ノ前遺跡から奈良～平安時代にかけての郷庁跡とみられる遺跡が発見されており、古代末には、中元寺から川崎町安真木にかけてあったとされる大宰府領「虫生別符」との関連が考えられている。また、永長２(1097)年に宇佐弥勒寺に寄進され、この虫生別符が後に中元寺荘となったと考えられている。

中元寺薬師堂には比叡山横川の恵心僧都が安置したという平安時代後期の薬師如来坐像（県指定文化財）があり、永承２(1047)年に後冷泉天皇の御願によって安楽寺金堂が建立され、「副田庄七十町」などが寄進された。これらは現在の町域が各地の寺社荘園に組み込まれる程の重要な場所であったことを物語っている。

中元寺薬師堂薬師如来坐像

## （3）中世

### 室町時代

南北朝時代の初期、田川地方は北朝方（幕府方）と南朝方（反幕府側）が勢力を競い、副田荘は鎌倉時代から地頭職を務めていた北朝方の島津氏と、南朝方によって地頭に任命された橘氏による二重に支配された。その後、室町幕府から派遣された九州探題の今川氏や渋川氏が九州の南勢力を一掃し、豊前国は幕府の一元支配が敷かれるようになった。戦国時代になると、豊前国を巡る争いは激化し、毛利氏と大友氏の抗争が繰り返され、田川地方は約10年間戦場になった。

## （4）近世

### 豊臣秀吉による九州平定と堅城岩石城の攻防

大友宗麟は、北九州のほぼ全域を支配下に治めたが島津氏に敗戦し九州の反対勢力の武将からの攻撃を受け、大坂城の豊臣秀吉に救援を嘆願した。秀吉は大軍を編成し、天正15(1587)年に九州平定に挑み、島津方の筑前の戦国武将・秋月氏の支配下にあった岩石城をわずか一日で落城させた。秋月氏と縁戚にあった彦山も所領を没収され、島津氏は秀吉との全面対決を避け降伏し、九州は秀吉により平定された。

### 毛利氏の支配

秀吉は各武将に九州の所領を割り振る国分を行った。豊前小倉の所領を与えられた毛利勝信は、英彦山の所領と権威を支配下に置こうとし、弟の毛利（森）久八郎吉勝の子息を彦山の座主にするように彦山に迫ったが、彦山座主は助有法親王からの血脈縁者を座主とすることを盾に要求を拒絶した。

慶長３(1598)年、秀吉の死後、重臣の徳川家康と石田三成が対立し、毛利氏は関ケ原の合戦に勝利した徳川家康に領地を没収され、13年間にわたった豊前国支配は終わりを告げた。

### 細川氏と小笠原氏の藩政

毛利氏のあと、細川忠興により豊前国が治められ、元和元(1615)年、一国一城令により豊前国は小倉城と中津城を除くすべての城が廃された。

寛永９(1632)年、播磨国明石城主だった小笠原忠真は、細川氏の後任として小倉城に入城し、「手永制」を用いた行政区画による細川氏の農村支配機構をそのまま継承した。



## (５)近代

### 石炭産業による繁栄

明治維新後、官営八幡製鐵所の操業により筑豊各地に炭鉱が開業し、藏内次郎作は明治18(1885)年に峰地炭坑の採掘を始め、大正４(1915)年に小倉鉄道が東小倉から上香春(現・香原駅)を経由して上添田(現・添田駅)まで開通した。軍需拡大に伴い、筑豊炭田は国内第１の産出量を誇った。

英彦山は旅館街を中心に炭鉱就業者の保養所として賑わい、峰地炭鉱のあった上添田駅(現・添田駅)に商業施設が集まり、映画館、劇場などの娯楽施設も整備された。

その後エネルギー政策を迎え、昭和44(1969)年に完全閉山となった。

### 石炭閉山後

炭鉱閉山後、本町は鉱害復旧事業や新産業の振興が図られ、ボタ山や炭鉱住宅が取り壊され、炭鉱という主要産業を失った代わりに、豊富な自然を生かした林業、水はけのよい中元寺金ノ原台地を生かした畑作農業などが地場産業の中心となった。

一方、深山幽谷の豊かな自然と悠久の歴史を育んできた英彦山は文化活動の場ともなり、女流俳人の杉田久女の英彦山を詠んだ歌などが有名である。また、英彦山神社の宮司となった高千穂宣麿男爵は、タカチホヘビを発見し、自ら開設した「高千穂昆虫学実験室」を九州帝国大学に寄附し、昭和11(1936)年に昆虫学研究の雄となる「九州帝国大学生物学研究所」が置かれることとなった。さらに昭和25(1950)年、英彦山は「耶馬日田英彦山国定公園」として国内最初の国定公園に選定され、観光振興とともに、産業と住環境の改善にも力をいれている。

峰地炭鉱　峰地１坑全景

## 2-4　社会的環境

### （1）人口

本町の人口は、平成 27（2015）年時点で 9,924 人、大字英彦山の人口は 119 名である。平成 7（1995）年以降、人口減少にある。

### （2）土地利用

本町の土地は、約 8 割が森林となっている。史跡英彦山の大部分を占める英彦山神宮奉幣殿より山頂域は、大部分が山林及び保安林であり、自然地となっている。英彦山神宮奉幣殿より西側は、宅地、田や畑、山林として利用されている。

### （3）交通

英彦山への交通アクセスは、国道 500 号から英彦山神宮奉幣殿付近まで通行可能である。最寄り駅の JR 日田彦山線の彦山駅からはコミュニティバスが通っているが、平成 29（2017）年 7 月の九州北部豪雨の影響により、添田駅から夜明駅（日田市）までが不通となっており、バス等による代替え輸送が行われている。英彦山内にはスロープカーが整備され、九州自然歩道や登山道等が整備されている。

### （4）観光

有数の観光資源である英彦山は、平成 17（2005）年のスロープカー開業等の取組により観光入客数が増加したが、英彦山信仰離れと近隣市町村の観光地整備等の影響により、微減している。英彦山への来訪者が最も訪れるのは、英彦山神宮奉幣殿であり、次いで上宮（中岳山頂）となっており、景観・自然、登山・トレッキングが英彦山の魅力にあげられる。

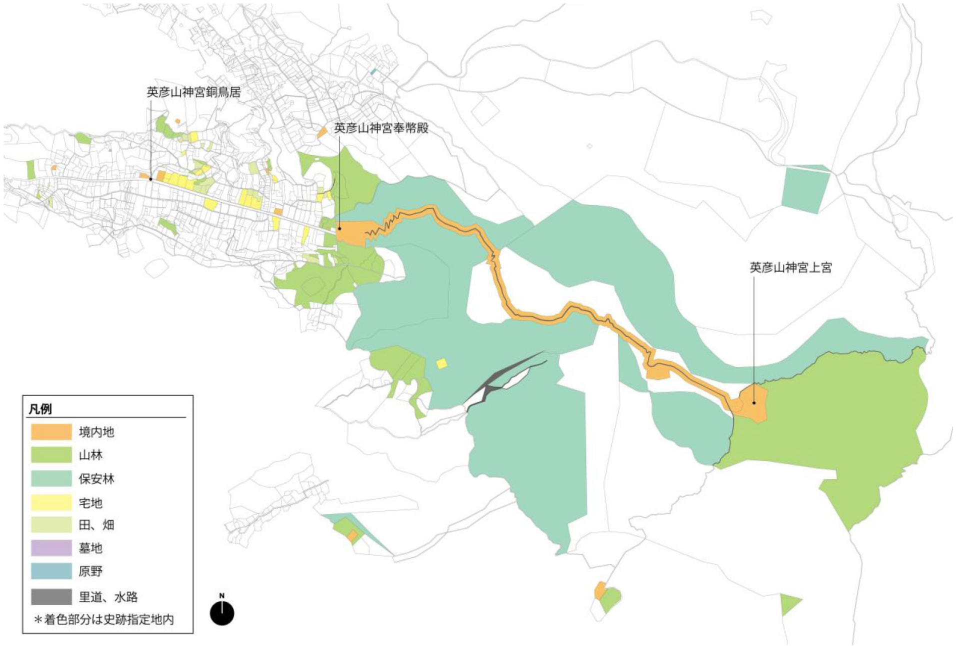



図 2-7　史跡指定地内の土地利用（参考：地籍調査）